

華嚴教学における無礙と真空觀

増 田 英 男

華嚴の「無礙」は如何にして成立し得るか。その理由根拠はどこにあるか。すでに以前の發表で述べたように、事事無礙は理事無礙を根拠として展開するのであり、従つて理事無礙の理由が説明されれば、事事無礙の理由はおのずから明らかになるわけであるが、その理事無礙における理は空に当り事は有にほかならぬ。理事の關係は空有の關係に還元せられる。故に空有の無礙が解明実証せられれば、理事無礙はすでに根拠づけられたことになる。この場合、既述の如く相對的緣起空觀の立場からするときは、空有の關係は相對空と相對有の關係としてなお相對性を残しているため、相互の無礙は兩者の相互交代によつて「一方が有なるときは他方は空」というように、無矛盾的（ないし矛盾回避的）に理論づけられるはかなかつたのである。では真空觀の立場からするときはどうなるか。

これを考究するために、まず杜順の次の文言に注目しよう。

空は是れ有を礙せざるの空、即空にして常有。有は是れ空を礙せざるの有、即有にして常空。故に有は即ち有ならず、有辺を離るるの有。空は即ち空ならず、無辺を離るるの空。空有円融、一にして無二。故に空有相礙せず。（五教止観）

これによれば空と有とはもはや相互否定的に對立せず、空は「無辺を離脱して有を礙せざるの空」有は「有辺を離脱して空を礙せざるの有」として空有は直ちに相即一体である。では何故このようなことが可能なのか。この要訣を明かすものが法藏の左の文言である。

A 全空にして即有、有は即ち空に徹するの有。全有にして即空、空は即ち有に徹するの空。有に徹するの空なるが故に一切は有に在りて而も即空。空に徹するの有なるが故に一切は空に在りて而も即有。……是を以て事は理に隨いて円通し、理は事に隨いて差別す。（遊心法界記）（原漢文、傍点筆者、以下同じ）

B 事を言えは即ち有、空源に徹す。理を談すれば乃ち空、有表に透る。（華嚴策林）

すなわちAによれば有は空に徹するの有なるが故に有即空であり、空は有に徹するの空なるが故に空即有である。しかもBによれば空は有の徹底還帰すべき本源であり、有は空の顕現発動すべき表相である。つまり空は単なる「有の否定」として有と対立する空ではなく、有の当処当体において開示せられる有自体の本源的真実相にほかならぬ。このような空はもともと対象的観念的に理解せらるべきものではなく、主体的実践的に有そのものの本源に徹することによって証得せらるべきものであらう。「徹」の一字こそ右の文言ABの眼目である。「徹する」とはすなわち三昧のことにはかならぬ。三昧こそ華嚴における真空觀の実践的基盤なることは前回の発表で述べた通りである。では何故三昧透徹において真空が証得せられるのであらうか。

もともと有自体——即ち有るものそのもの、さらには有るということそのこと——は、対象的相対的な知解分別を超えている。有自体は外から対象的に認識し規定することはできない。それはただ有自身が直接有自体に成り切って、内から主体的に自証するのほかない。つまり有が有の三昧において自証するまでである。しかも三昧の当体においては、主客理智等の対立を絶し一切の概念的な限定を超えて純一無雜なるが故に、もはや「有」という限定を脱している。具体的に何物か「である」という限定を脱するのみならず、根源的に

「有る」という限定をも脱している。しかしそれは何も「無い」ということではなく、「無」という限定をも超えている。この絶対無限定の当体をして名づけて「真空」といい、実践的には「解脱」というのである。かかる一切の限定を脱した解脱真空の当体こそ、有の本源的真実相にほかならぬ。すなわち有の三昧において有の解脱が自証せられ、真空無相の本源的真実相が顕わとなるのである。換言すれば有が有自体に透徹することにおいて有は有自体を脱却しているのである。透徹（三昧）と脱却（解脱）とは実践的に即一である。これをつづめて「透脱」と呼ぶならば、有が有自体を透脱した当体が真空にほかならぬ。或いは有の透脱態が真空であるといってもいい。かくて有と空とはもはや相対立せず、全く有即空である。これを裏返せば、真空無相の本源的真実相にまで徹底透脱するということは、有が真に純一無雜に有自体であるということであるから、真空なればこそ有はその本源実相に徹して真に有るということになる。つまり空は有を否定抹殺する対敵ではなく、かえって有をして真に有らしめる根底基盤である。かくて空と有とは相対立せず、全く空即有である。かくの如く空有全く相即するにより、理事おのずから無礙となるのである。理事無礙の理由根拠は、このような三昧を實踐的基盤とする透脱的真空觀によって、きわめて明白かつ徹底的に覺証せられ説明せられ得るのである。

さて理事無礙がすでに明白に根拠づけられた以上、事事無礙は理事無礙を根拠としてのおのずから説明せられるわけである。一般に理事無礙を根拠とする事事無礙の説明は、華嚴教学において種々の側面からなされている。例えば杜順の『法界觀門』は事事無礙を十門に分ち、理事無礙に直結する「理事・事如理」の二門を根拠とし前提としてまず「事含理事無礙門」を開き、その上でまた事事無礙を「一中一・一切中一・一中一切・一切中一切」の四門に分ち、さらに「通局無礙・広陝無礙・遍容無礙・摂入無礙・交渉無礙・相在無礙・普融無礙」の諸門を展開し、澄觀の『法界玄鏡』及び宗密の『注法界觀門』はさらにこれを広釈している。また法藏の『五教章』は法界縁起を「自体・異体」の二門に分ち、兩門における一多無礙を十数の喩を以て解説し、『探玄記』巻一は無礙の十由を挙ぐる第一「縁起相由故」の条に、「諸縁各異・互遍相資・俱存無礙・異門相入・異体相即・体用雙融・自体相入・自体相即・俱融無礙・同異円備」の十義を挙げて事事無礙の理由を説いている。しかしこれらの解説の中には、以前の発表で検討したように、もっぱら知解分別の立場からする相互対称的無矛盾的な無礙解釈が多分に含まれており、その根底には相対的空觀たる縁起空觀が前提せられているのであって、その限り未だ眞の無礙——絶対矛盾的自己同一としての無礙——を解明し根拠づけたものとはいえない。

眞の無礙を解明し根拠づけるには、どうしても知解分別を超えた行的覺証としての真空觀によらねばならぬ。

では真空觀によつて事事無礙はどのように説明せられるであろうか。ここでは『探玄記』巻四に説かれる「非実」による無礙解釈の文を手がかりとして考察を進めることとする。これは自体・異体にわたる相容・相即の由因を説く中で、「展転生」による解釈と並び説かれたものであるが、文中の肝要な個所を抜き出すと左の如くである。

一には相即の義。謂わく、一は実の一に非ず、故に能く多を摂す。多は実の多に非ず、故に能く一に即す。……二には相容門。謂わく、一事は是れ実にあらず、無性を以ての故に。無性の真理既に分限無し。是の故に一事上に於て無性を觀するの時、円に法界眞如を尽さざる無し。……眞を摂し尽すの時、余の一切の法既に存するを廢けず。而も眞に即するが故に理に同じて俱に一事中に在りて現す。多の中も亦爾り。」

この文について考えるに、まず初の相即の義における一多の一は、全一の一即ち普遍的な一般者としての一ではなく、個一の一即ち特殊的個別者としての一である。従つてここに説かれる一即多・多即一は事事無礙を表わす。そしてその相即無礙の理由として「一は実の一に非ず、多は実の多に非ず」ということが説かれているのである。つまり一は実の一でないから多に即し、多は実の多でないから一に即するといふの

である。では「一が実の一でない」とはどういうことであらうか。この場合、これを縁起空觀の立場から「一は縁生の一であり無自性の一であるから、実体の一ではなく幻仮の一であり、常に多との縁起的相依相関においてのみ顕現する」という風にも解釈できるが、これを上述のような行的覺証としての透脱的真空觀によつて解釈するとき、一層徹底した意味内実が把握されると思う。即ち一は純一に自体であり一三昧であるが故に、いわゆる「一」という相對的限定を脱却している。つまり一は透徹して一自体なるが故に一自体を脱落している。「一は実の一に非ず」とはここをいう。つまり「一は一を透脱している」ということである。かくて一は單なる限定的固定的な一（実の一）ではなく、透脱的一（真空無相の一＝非一の一）として、他の一一のそれぞれに、また一一の總てに融通し得るものである。しかも總ての一が皆それぞれ同様に透脱的一なのであるから、多くの一一がいかに千差万別であつても、皆透脱者同士の關係として相互に障礙衝突せず、差別歴然たるまま平等一味であり、對立矛盾のまま融通無礙である。かくて一は他の一一ないし一一の總体たる多と相即することができるわけである。逆にまた一一の總体たる多も、透脱的多であるからには、「一に對する多」という相對的限定を脱して真空無相の多（非多の多）なるが故に、多のままで一と相即することができるわけである。かくて一多互

いに相即して無障無礙たり得ることとなる。

次に相容門は、一事と一切法との間の相容相入を説いて同じく事事無礙を表わすのであるが、その相容無礙の理由として一事の「不実無性」を説く。これも縁起空觀の立場から解釈できるが、透脱的真空觀の立場から解する方が意義一層鮮明でありかつ深遠である。即ち一事の不実無性とは、一事の透脱的在り方を意味する。相對的知解分別の對象として見られる限り、一事は他事と相對的に區別せられた限定的な一事であるが、そのような知解分別の眼鏡を通さぬそのもの自体の実相においては、一事は本来透脱の一事である。その透脱の当体こそ一切の限定を脱した真空無相の本源的真実相にほかならず、尽乾坤尽十方界を貫く真如法性そのものにほかならない。故に一事において全宇宙の真如を摂し尽している。全宇宙の真如を摂し尽すからには、宇宙における他の一一の事事物物の總てを、少しも損傷することなくそのまま包容することができる。まさに「三界唯心、心外無別法」である。しかも他の一一の事が皆それぞれ同様に透脱の事であり、透脱底において真如ないし一切法を包摂し尽しているわけであるから、一事と一切事とは互いに相容相入無礙自在たり得ることになる。以上のように『探玄記』の文を解することによつて、事事無礙の理由は明白に解明せられると思う。

これを要するに理事無礙・事事無礙を通じ、その無礙の理

由根拠は、知解分別を超えた行的覺証たる透脫的真空觀にこそ求めらるべきである。一切の事法は透脫的真空無相の真如法性を本性とし源底とするが故にこそ、正しく一切の事法として在り、かつ一切事法相互に融通無礙であり妙用自在である。無礙無尽の法界縁起がかくてこそ現成する。まことに法藏が『十二門論宗致義記』に

真空あるを以つての故に方に諸法有るを明す。又真空を觀するに由つて方に諸の行を成す。是の故に十度等の行、皆空に由つて成じ、菩提等の果、皆空に由つて立つ。是の故に此の真空無住より諸法を建立し、又諸法をして、相即相入、無障無礙なることを得しむ。

と説く通りである。このように真空無相の本性本体から無礙無尽の妙有妙用を起すことを華嚴教学では「性起」と呼び非常に重んじている。智儼が『孔目章』に「性起とは一乘法界を明す縁起の際。……起即不起、不起なる者は性起なり」と説き、法藏が『義海百門』に「性起に通ずとは……不起即起なるを以つて起は乃ち縁生を顯す」と説き、また『探玄記』に「起は縁を攬ると雖も縁は必ず無性なり。無性の理、縁処に顯る。この故に顯に就いて但性起と名づく。無住の本より一切の法を立つ等の如し」と説くが如く、華嚴の法界縁起無礙無尽の法門は性起によってこそ基礎づけられるのであり、その性起とは上述の如き透脫的真空觀に基づく真空即妙有の端的の別名にほかならぬのである。

- 1 拙稿「華嚴教学における無礙と空」(一) 印仏研二七一。
- 2 大正四五、五一頁中、法藏の『遊心法界記』(大正四五、六四四頁上)に同文に近い記述がある。
- 3 大正四五、六四七頁下。
- 4 大正四五、五九七頁中、ただし「理を談ずれば」の理が有になつてゐるが、これは恐らく理の誤記であらう。
- 5 大正四五、六八〇頁上―六八三頁上。
- 6 大正四五、五〇三頁上―六〇四頁下。
- 7 大正三五、一二四頁上―一二五頁上、cf. 一七三頁上―下。
- 8 拙稿「華嚴教学における無礙の解釈の問題点」(一)(二) 印仏研二五一・二六一。
- 9 大正三五、一七三頁中下。
- 10 大正四二、二一七頁下。
- 11 依レ体起レ用名為「性起」(「安忍還源觀、大正四五、六三九頁中」)不改名レ性、顯レ用称レ起。……真理名レ如名レ性、顯レ用名レ起名レ来。〔探玄記、大正三五、四〇五頁上、〕
- 12 大正四五、五八〇頁下。
- 13 大正四五、六三二頁中。
- 14 大正三五、四〇五頁中。

(元明治薬科大学教授)